伊豆半島ジオパーク
IZU PENINSULA GEOPARK

vol.08
2025年12月-
2026年3月

伊豆半島ジオパーク News Letter

今号のトピックス

- 世界ジオパーク3度目の認定
- パートナーシップの取組
- ジオリアでの展示とイベント
- その他イベントレポート
- ジオパーク学習
- 域内・国内・世界とのネットワーク
- 次世代ジオガイド研修
- ジオパーク産品認証制度スタート

unesco Global Geopark

ユネスコ世界ジオパーク3度目の認定！

ユネスコ世界ジオパークは 4 年ごとに再認定審査が行われることになっています。伊豆半島は 2018 年のユネスコ世界ジオパーク認定から数えて、今回で 3 回目の審査となり、このたび認定の通知を受け取りました。地域の皆様とともに取り組んできた伊豆半島ジオパークの活動が評価されたものであり、ここにご報告申し上げますとともに、これまでのご理解とご協力に深く感謝申し上げます。

再認定期間は 2026 年 1 月 1 日から 2029 年 12 月 31 日までの 4 年間です 。

再認定に伴い、ユネスコよりさらに改善・強化すべき点として以下 5 つの項目が示されました。

1 気候変動および自然災害に関連する課題への取り組み：
- 地質災害への意識啓発および災害リスク軽減に関する戦略と教育プログラムを策定し、住民と訪問者の双方が確実に情報を得られるようにすること。
- 特に農業や沿岸地域において、教育機関、学生、地域コミュニティを巻き込んだ定期的なイベントを増加させ、気候変動に関するジオパークの戦略を強化すること。

2 管理：ジオガイドだけでなく、事務局スタッフを対象とする能力開発プログラムを強化すること。

3 ネットワーク：ジオパーク間のネットワークを維持・強化し、国外の他のユネスコ世界ジオパークとの共同プロジェクトを開始するとともに、他のジオパークとのパートナーシップ協定を最大限に活かして、世界的なジオパークネットワークに一層の貢献を果たすこと。

4 持続可能な地域づくり：来訪者アンケートのデータを活用してジオパークの発展計画を策定すること。この際に、来訪者と地域住民双方の意見に基づき、サイトの価値を将来に亘り高めてゆくこと。

5 パートナーシップ：商品やプロモーションにおけるジオパークのロゴ使用に関する明確なガイドラインを策定すること。

6 地質遺産：地質、自然、文化の相互関係に基づき、159 カ所のサイト管理方法を検討すること。この際に、効率的かつ偏りのないサイトの管理と魅力向上が実現するよう、地質学的テーマが類似する近隣のサイトをグループ化すること。

これらの指摘事項に準拠し、引き続き伊豆半島ジオパークを持続可能な地域として推進してまいりますので、今後とも変わらぬご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

REVALIDATION

発行元：(一社)美しい伊豆創造センター　ジオパーク推進部　☎ 0558-72-0520
〒410-2416　静岡県伊豆市修善寺838-1 修善寺総合会館内　info@izugeopark.org　URL https://izugeopark.org/

食 × 学び　静岡ガスグループとの連携

「春を彩る伊豆の桜とお祝いごはんづくり」

静岡ガスグループと伊豆半島ジオパークの連携イベント「ジオぱく」は、スタートから 6 年目を迎えました。毎年「海」、「川」とテーマを設けて伊豆半島の気候や地形ならではの恵みを学び、味わう体験を提供しています。2026 年は、「山」がテーマ。2 月 28 日（土）の初回は、春の伊豆の山々を白く彩る「桜」を取り上げました。当日は「ふじのくに地球環境史ミュージアム」で企画展「さくら × サクラ」を担当しているミュージアム研究員の渋川教授においでいただきました。前半の座学では、日本の在来種である桜のほとんどが静岡県内に自生していること、特に伊豆諸島や伊豆半島に自生する「オオシマザクラ」は、交配によって多くの園芸品種を生み出していること、香りや舌触りが良いため桜餅の素材として使われること、伊豆の松崎町はそのシェアのほとんどを占めていることなどを情熱いっぱいに話していただきました。後半の食のパートでは、静岡ガスエネリアショールーム柿田川のスタッフが、オリジナルレシピを使った調理体験を指導してくれました。芳香な桜葉漬を使った桜餅と、東伊豆で祝いの席に振る舞われる郷土料理「黄飯（きめし）」を作って味わいました。桜葉漬をお吸い物に使うなど、意外なアイデアも。春の到来をお祝いしたくなるようなイベントとなりました。

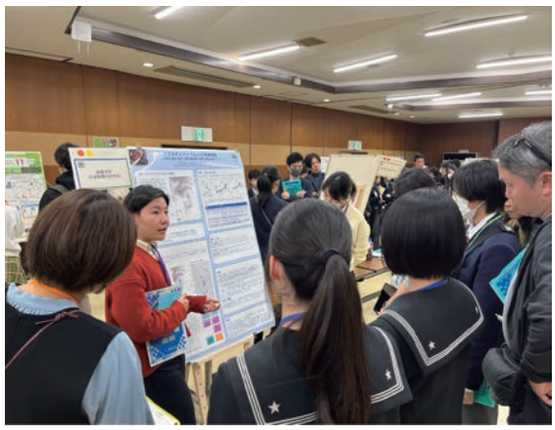
＜桜葉を用いた華やかなお膳＞

＜クチナシでお祝いごはんを着色＞

静岡大学との連携

ジオパーク学術研究助成（探究学習サミット）

3 月 7 日（土）に修善寺総合会館を会場に、静岡大学未来社会デザイン機構との共催で「探究学習サミット」を開催しました。午前中にジオガイドの案内によるまちあるきと伊豆半島ジオパーク学術研究発表会が、午後には伊豆半島周辺の児童・生徒を含む 21 チームによる発表がおこなわれました。学術研究発表では令和 7 年度に助成を受けた 3 名の研究者のうち 2 名により、伊豆半島に生息するイズコツブムシ（水辺にすむダンゴムシの仲間）の進化的起源の解明や、スズキダニザトウムシ（森にすむクモのような形をした生き物）の系統地理をテーマにおこなった研究の成果が報告されました。学生の成果発表では県立松崎高校など 11 校 17 チームが、地域の特産品・伝統産業や買い物支援、温暖化による生態系への影響など、身近な自然や暮らしをテーマに探究した内容を発表し、来場した他校の生徒や保護者、地域の方々と活発な交流をおこないました。

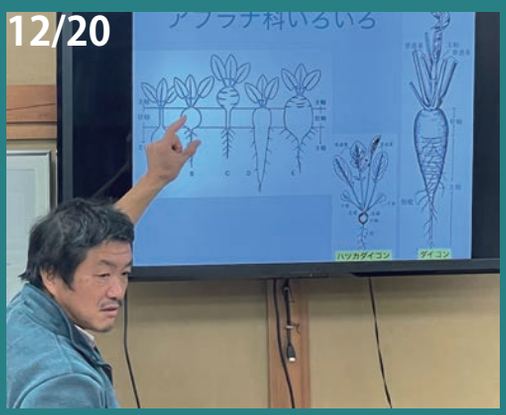


＜探究学習サミットのようす＞

partnership

GEORIA

12/20



＜野菜の部位と可食部の関係について＞

ワークショップ

「伊豆の大地が育む“おいも”のはなし」

今回のワークショップでは静岡大学の徳岡徹教授を講師に招き、芋をテーマに扱いました。ジャガイモ、里いも、サツマイモなど、芋とひとくくりにされているものについて、その好む生育環境や植物の器官としてはたらきなど、別の角度から学ぶ機会としました。

講義のあとは西伊豆町安良里（あらり）地区で食べられているさんま出汁をつかったとろろ汁の試食を行いました。サンマ漁が盛んであった同地の歴史や習慣とそこから生まれた食文化について安良里地区の方から直接お話を聞きました。今回は１人で申し込む男性の参加者が多かったですが、講義やその後の試食時間も講師を交えて話題が盛り上がりました。

＜サンマ漁で盛えた町ならではのお話を聞く＞

ジオリアでの「ミュージアムジャック」

ミュージアムジャックは“リアルごっこ遊び”を通して、社会教育施設等でのガイドやスタッフの知識・技術を学び、主体的な学びをを促す学習方法です。静岡大学の田宮教授がこのプログラムを手掛けています。

2 月 3 日 (火)、伊豆の国市立大仁北小学校の 5 年生が、ジオリアでミュージアムジャックをおこないました。大仁北小学校は、静岡県伊豆の国市守木にある全校児童 200 名あまりの小学校で、地域と連携した教育活動が特徴です。今年は 5 年生 32 名がジオパークについて「火山」や「柱状節理」などそれぞれのテーマで探究学習に取り組み、ジオリアでのミュージアムジャックに臨みました。当日は、学習内容を紙芝居で発表したり、水理模型を解説したり、インフォメーションボードを書き換えたりと大活躍。訪れた大人たちを感心させていました。

＜紙芝居で火山の仕組みを解説＞

ジオカフェ

「森林と親しく付き合う方法って、何だっけ？」

12 月 14 日 (日)、森林と人との関わりをテーマにしたジオカフェを開催しました。当日は伊豆半島南部からの来場者を中心に 22 名が参加しました。講師は東京大学樹芸研究所の齋藤暖生先生で、聞き役はジオパークの佐々木恵子研究員です。昔の暮らしの中での森林利用や、手入れされなくなった山の現状についてのお話がされる中で、参加者からも、子どもの頃に親から山の知識を教わった思い出や、山の活用についての課題といった話題が飛び出しました。午後は雨も上がり、下田公園での植物観察ウォークへ。午前中のお話をなぞりながら歩きました。地域の森林について改めて考えるきっかけとなり、人と自然のつながりを見つめ直す、実りあるひとときとなりました。

＜研究員による植物の解説＞

Event

三島・長泉にてジオパークロゲイニング大会を開催しました

3 月 8 日（日）、「伊豆半島ジオパークロゲイニング 2026」が三島市・長泉町を舞台に開催され、271 名が参加しました。静岡県内に加え、首都圏を中心に県外からも多くの参加者が訪れ、全体の半数を占めるなど広域的な集客となりました。当日はロゲイニングにうってつけの爽やかな青空となりました。参加者は 6 時間・4 時間・2 時間の各コースに分かれ、地形や湧水、歴史文化資源など多彩なチェックポイントを巡りながら、伊豆半島ジオパークの魅力を体感しました。競技後は表彰式や抽選会も行われ、地域の賑わい創出と魅力発信に寄与する大会となりました。アンケートでは、ジオパークの資源を活かしたコースが好評で、「地域の魅力を再発見できた」など実際に町を舞台にしたスポーツならではの反応のほか、「また参加したい」「運営がスムーズ」といった好評をいただきました。今回は従来の 4 時間、6 時間コースに加え、2 時間コースが新設されたため、親子連れの方も気軽に参加するなど、幅広い世代が楽しむイベントとなりました。ジオパークロゲイニング大会は今回で 8 回目となり、令和 8 年度も開催を予定していますのでぜひご参加ください。

＜参加者と市長の交流＞

＜ジオパークを満喫しながら競技する参加者＞

ジオカフェ「おんせんはたいへん～金のふろおけ～大仁温泉編」

1 月 25 日 (日)、静岡県温泉協会との共催によるジオカフェ「おんせんはたいへん～金のふろおけ～大仁編」を開催し、伊豆市、伊豆の国市を中心に 38 名が参加しました。今回は温泉と金山の関りがテーマで、前半は大仁駅前の足湯からのウォークで水晶山や温泉の源泉、大仁金山跡を関係者のガイドで巡りながら、大地の歴史と地域の暮らしとのつながりを体感しました。後半のトークでは、地域で金山の保全や活用に取り組む登壇者 3 名を迎え、ジオパークの遠藤大介研究員が聞き役を務めました。金山愛溢れる登壇者の話に、会場からも当時の記憶やエピソードも飛び出し、終始楽しい雰囲気に包まれました。アンケートでは、「地元なのに知らないことばかりで新鮮だった」「金山と温泉、暮らしのつながりがよく分かった」といった声が多く、学びと発見の機会として高い評価を得ました。現地ウォークも「実際に歩いて理解が深まった」と好評で、源泉やまちの風景を改めて見直すきっかけになったようです。今回のジオカフェは、地域からの「話題を共有する場として活用したい」という声から生まれました。今後もこうした機会を広げていきたいと考えています。

＜温泉と金山の意外と密接な関係が明らかに＞

NETWORKING

ビジターセンター情報交換会

＜探究学習発表会のようす＞

年２度行われるビジターセンター情報交換会の第２回目は、域内のビジターセンター関係者が他所のビジターセンターを訪れ、その取り組みや先進事例・課題を共有し、意見交換する機会としています。2 月 24 日（火）には年間複数の自主イベントを開催し、ビジターセンター発着のジオガイドツアーや西伊豆特産品の販売や飲食メニューを提供するなどの取り組みを行っている西伊豆ビジターセンター（黄金崎公園内こがねすと）で開催しました。まず認定ジオガイドでもある勝呂勤務員よりビジターセンターの利用状況として、2020 年に運営を受託してから毎年利用客が増えていることや、地域住民の交流の場にもなっていることの説明がありました。お昼には西伊豆特産品を使った「潮かつお丼」を全員で試食、午後には黄金崎周辺を巡るジオツアーを行い、最後に参加者からの質疑応答を行い終了となりました。

ジオパーク・キャラバンの開催

＜活発な意見が飛び交う＞

ジオパークキャラバンは、市民の声を運営に活かすことを目的に、昨年から各地で開催しています。
1 月 17 日（土）の下田ビジターセンターでは南伊豆のジオガイドが集まり、養成や地域格差、持続性、情報共有の課題について意見交換が行われました。講座の実践化やオンデマンド化、行政への働きかけなどの提案が出されています。
1 月 24 日（土）の長泉ビジターセンターでは、今後の運営方針を議論。「観光や石の解説」にとどまらず、地域づくりや防災への役割拡大や、情報発信の強化が課題として共有されました。

ワーキンググループによる答申の作成

ジオパークは、草の根の声を聴いて運営しなくてはいけない。これは、ジオパークの運営に携わると繰り返し繰り返し聞かされる言葉ですが、どう実現するかといわれると、はっきりした答えは与えられていません。しかし、思いついたように市民を集め、挙がる声を聴いたとしても実現するかしないかは運営側の気分次第では意味がないことは確かです。
私たちの出した答えは、ジオパークがこれから５年間の計画を市民委員と一緒に作ることでした。このほど高校生、大学生といった若者代表も参加して１年間あまりかけた審議が終わり、答申が提出されました。保全、教育、持続可能な地域づくりという３つの分野で、私たちだけでは想像さえつかなかったような新事業が次々と提案されました。これを盛り込んだ基本計画は６月くらいに発表を予定しています。

NETWORKING

第２０回 JGN 全国研修会

12 月５日（金）～７日（日）、愛媛県四国西予ジオパークにて「防災・減災－これからの被災地にジオパークは何ができるか－」をテーマに開催され全国から40名が参加しました。研修は講演、グループごとの協議、西予市を襲った平成 30 年７月豪雨災害の被災地域住民の話、現地見学会、各地域の事例紹介を経て、グループ内での各テーマに対する解決策・対応を議論し発表を行いました。当ジオパークの事例や自分の考えをまとめた上で研修を受けましたが、実際に被害を受けた方や復興に尽力された方の話を聞き、防災・減災に対して行政とは違う貢献として、ジオパーク活動での人づくりにより地域のリーダーの育成やネットワークを活用した情報共有や啓発活動など、ジオパークだからこそできることが数多くあることに気が付きました。

＜研修会のようす＞

第 13 回 JGN 中部ブロック立山黒部大会

２月５日（月）、６日（火）、富山県立山黒部ジオパークにて中部地域のジオパーク関係者が「ジオツーリズムのブラッシュアップ」をテーマに研修を行いました。地域の特色を生かしたツアーの企画やガイドのスキルアップ等について事例発表や意見交換を行いました。伊豆半島からは他地域にはない若手育成プログラム「次世代ジオガイドリーダー養成事業」を発表し、大きな反響がありました。

＜中部ブロック各地からの参加者＞

＜次世代ジオガイド養成事業について発表＞

TOURISM

次世代ジオガイド研修

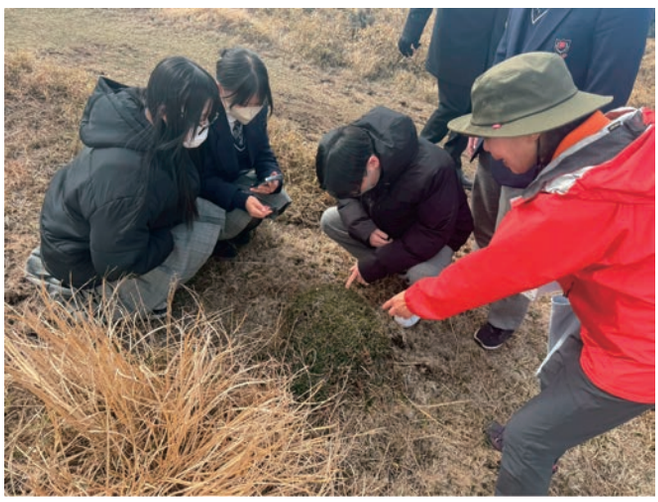
12 月に伊豆大島ジオパーク、１月に下田市内、２月に沼津市淡島で研修を行いました。ベテランガイドから地域の魅力をいかに伝えて楽しんでもらえるか等、お客様の目線に立ったガイディングやジオサイト周辺の文化、歴史、生態系を学びました。研修受講者の今後の活躍が期待されます。

＜伊豆大島でのガイド研修＞

GEOPARK-EDUCATION

室戸ジオパークからの高校生受け入れ

昨年高知県の室戸ユネスコ世界ジオパークでは、高校生が組織した実行委員会により「ジオパーク国際ユースフォーラム 2025 in 室戸」が開催され、伊豆半島からは韮山高校生が参加し、交流を深めました。3 月 10 日 (火) ～ 13 日 (金) の期間、室戸高校生が伊豆半島ジオパークを訪問しました。高校生は、韮山高校を訪問して、普段の研究についてプレゼンを受けたり、伊豆半島の産品認証制度に関連する生産の現場を訪れたりして過ごしました。



＜食害の問題と野生動物の痕跡探し＞

＜伝統的な加工食の担い手からの話＞

伊豆箱根鉄道に新しいジオトレイン運行開始　今回は韮山高校とのコラボ

伊豆箱根鉄道と美しい伊豆創造センター、そして沿線の高校が連携して運行する「いずっぱこ ジオトレイン」。知徳高校が制作した第７弾に続き、このたび韮山高校と連携した第８弾が２月３日 (火) に運行開始しました。同校が手掛けるジオトレインは４回目。

今回は「意外と知らない伊豆半島」をテーマに、同校の化学部、生物部、文芸郷土研究部、写真報道探究部が作成した記事をシールにして車内に掲出し、美術部がデザインしたヘッドマークを車両の前後に取り付けました。ジオパーク推進部が監修を行っています。高校生ならではの視点と感性で、伊豆半島の魅力を発信していきます。写真は今回のジオトレインに関わった生徒たちとの運行開始式の様子です。

ジオ検定 1.2 級を開催　1 月 18 日（日）に今年も伊豆半島ジオパークについての知識を問う上級者向けの検定を開催しました。1 級の合格者が 1 名あり、ジオリアにネームプレートを掲示しました。

CERTIFICATION

伊豆半島ジオパーク産品認証制度が立ち上がりました

伊豆半島を舞台に活動する生産者・事業者を応援し、地域の魅力や取り組みをアピールするため、「伊豆半島ジオパーク産品認証制度」が創設されました。この制度の下、ジオパークストーリーと紐づく産品を取り上げる「特産品認証制度」とサステナブルな生産活動を応援しようとする「サステナブル産品認証制度」の２つの制度が立ち上がりました。
令和７年度は、次の産品が認証されました。

イズシカ問屋の一次産品１種類
（伊豆市）
〇サステナブル産品認証制度
（生物多様性の保全のうち、
シカの適正な個体数管理）

カネサ鰹節商店の二次産品５種類
（西伊豆町）
〇特産品認証制度（潮かつお）
〇サステナブル産品認証制度
（文化の保全のうち、記憶の継承）

令和８年度から販売が始まります。認証産品には認証シールが貼られていて、ここに掲載されたQRコードを読み込むと、認証産品が伊豆の特産品たる所以や持続可能な社会づくりに貢献する理由を読むことができます。６月完成を目指して産品認証制度のウェブページを構築中です。

伊豆半島ジオパーク
IZU PENINSULA GEOPARK
特産品認証
伊豆と潮かつお

＜認証産品に貼られるシール＞

伊豆半島ジオパーク産品認証制度
伊豆半島ジオパーク IZU PENINSULA GEOPARK
AUTHENTICALLY IZU 特産品
SUSTAINABLE IZU サステナブル産品

＜取り扱い店舗に掲示するマーク＞

＜ジオリアでも販売しています＞

部長コラム

WBC が終わりました。普通に生活していると、優勝したベネズエラという国に住む人の姿を想像しにくいと思います。サッカーの W 杯がなければ、セネガルやカメルーンなども多くの人の視界に入らなかったかもしれません。
ジオパークの世界はどうでしょう？世界ネットワークの拠点はギリシャの離れ島です。昨年の世界大会はチリのアンデス山脈の麓でした。独特ですよね。世界のどこにいっても、ジオパークは大抵田舎、僻地にあります。そんな地域同士、覇権国アメリカも大都会の役人やビジネスマンも介さず、直接知り合い語り合えること。ひとつひとつは小さく存在さえ知られない者たちによる「草の根のリーグ」であること。それが世界ジオパークネットワークの唯一無二の魅力だと、私は感じています。